広島県連合小学校長会
広報

発　行　所
広島県連合小学校長会
事　務　局
東区光町１－11－５
地産ビル1003号
電話（082）263－6381
発行者　坂田　登

世界人たれ…日本初の金メダリストに想う

海田町出身の織田幹雄氏は日本人初のオリンピック金メダリストである（1928年アムステルダム五輪　三段跳15m21cm）。昨年，世界陸連が織田氏の功績を改めて世界的な遺産として称えるなど，100年経ってもその偉業は変わらぬ輝きを放っている。

幼い頃から努力・研究の人であり，「世界人たれ」と国内外問わず多くの若者を導いた織田氏は，生き方でも人々を魅了する。

「織田幹雄さんは町の誇り」と胸を張る海田の子供たちが，近い将来，世界人となって活躍してくれるものと期待する。

※JR海田市駅に近い織田幹雄記念館（織田幹雄スクエア内）では，織田氏に関する資料等を無料で御覧いただけます。ぜひ一度おいでください。

（海田町立海田南小学校・西岡律子）

もくじ

世界人たれ…日本初の金メダリストに想う……1
事務局日誌……1
教育研究大会福山大会を終えて……2
学校経営……3～4
朝会講話……5
県教委だより……6
随想……6
あとがき……6

事務局日誌

7月1日『会報一九〇号』発行
7月5日　理事会（リモート）
7月21日　幹事会（東区）
7月29日　第1回中国地区理事会・研修会（リモート）
8月4日　教育研究小委員（書面）
8月19日　人事給与小委員会（リモート）
8月23日　第58回県連小教育研究大会福山大会（福山市）
8月25日　総務会（東区）
9月5日　県公連不祥事防止対策特別委員会（立町）
9月6日　理事会（リモート）
9月15日　速報No３発行
9月26日　全連小教育課程委員会（東京）
10月3日　小学校教育の充実に関する施策と予算について提出並びに意見交換（県教委）
10月11日　県公連理事会・評議員会（立町）
10月13日　全連小理事会（東京）
10月14日　第74回全連小研究協議会島根大会（東区・松江）
10月18日　幹事会・県市連絡協議会（東区）
10月21日　全連小三地区対策・調研担当者連絡協議会（福岡）
10月25日　人事給与全体会（東区）
10月26日　広報委員会（東区）
11月7日　県公連不祥事防止対策特別委員会（立町）
11月21日　全連小教育課程委員会（東京）
12月1日『会報一九一号』発行
※会場の略号
（東区）東区民文化センター
（立町）広島経済大学立町キャンパス

一歩先へ～福山からの提案～

第五十八回広島県連合小学校長会教育研究大会福山大会を終えて

現地実行委員長　寄髙俊樹

新型コロナウィルスの感染拡大の収束が見通せない中、三年が経過しようとしています。この間、社会経済活動も生活スタイルも変化し続けてきました。

私たちの教育活動も同様に、感染対策に取り組みながら、タブレット端末の導入、オンライン学習等、急激な変化の中で試行錯誤を繰り返しながらコロナ禍での「主体的・対話的で深い学び」を学校経営の中心に据えて、実践を積み重ねてきました。

こうした中、本年八月二十三日（火）、会場で開催する大会としては、三年ぶりとなる「広島県連合小学校長会教育研究大会福山大会」を会員の皆様のご理解とご協力により開催することができました。

これまでの経験を生かしながら、夏季休業中の午後開催や会場設定、分科会のもち方を検討し実施しました。県内の感染状況から、直前になって参集方法を変更したため、規模は縮小となりましたが、会場と各所属をリモートで繋ぎ全県に配信するなどして、これまでにない形で、開催できましたことを大変うれしく思っております。

ご来賓の広島県教育委員会教育長平川理恵様から、「学びの変革」の更なる加速とカリキュラムの質的向上、教員の資質・能力の向上、探究的な学びの推進をはじめ、不祥事防止に向けて教職員との信頼関係の構築に向けて取り組んでいただきたいとのビデオメッセージをいただきました。

ご臨席を賜りました福山市教育委員会教育長三好雅章様からは、「子供たち一人一人の経験や思考の過程を観ながら、子供たちが自ら考えることを促す教職員の役割を実感をもってつかんでいくことが大切である」とのご祝辞をいただきました。

実践提案は、十分科会を代表して、第九分科会の福山市立網引小学校河田節生校長先生にお願いしました。～子ども自ら地域とつながり、地域に働きかける教育活動の推進～と題して、地域に根差した教育活動の具体とともに、ふるさとを愛し、チャレンジする子供、自己理解・自己表現する子供たちの姿が感じられた提案でした。

指導・助言をいただいた福山市教育委員会学びづくり課長本宮政尚様からは、「実践発表の中にあった様々な体験から生まれた興味や関心・疑問を、さらに自分で調べ体験・実践することから新たな学びが生まれていたこと、そこで得られた知識は、簡単に剥がれ落ちない。」とのご助言がありました。

この他誌上提案となりました校長先生方の発表の中にも、コロナ禍にあっても着実に歩を進められた教育実践を拝見することができました。

そして、大会の最後には、福山シティフットボールクラブ代表岡本佳大様から、「福山から世界へ」―地域課題解決型ベンチャーフットボールクラブの挑戦―と題してご講演をいただきました。「福山からJリーグ参入」という夢と志をもち、様々な困難にも前向きに、そして先を見通した経営戦略をもち、様々な方々とつながり挑戦し続ける姿は、私たち校長の学校経営とも重なる大変意義深く参考になるお話であったと感じました。

私達は、今、次の時代を担う子供たちのために、授業で、学校行事で、「主体的・対話的で深い学び」の深化とともに、新たな教育の姿をめざし、教職員とともに取組を進めています。

本大会の実践・誌上提案から、その実現に向けた取組を学ばせていただくことができたと考えております。

そして、今大会が今後の広島県連合小学校長会研究大会の新たな学びの形として、一歩を踏み出すことができておりましたら幸いです。

最後になりましたが、本大会の開催にあたり、ご理解・ご助言をいただきました坂田登会長をはじめ県連小役員の皆様、ご支援をいただきました県連小事務局、会場でまたリモートでご参加くださいました校長先生方、そして、現地でこの大会を支えてくださいました校長先生方・関係者の皆様に改めて感謝を申し上げます。

（福山市立深津小学校）

第58回　広島県連合小学校長会教育研究大会福山大会

と　き　令和４年８月23日（火）
ところ　広島県民文化センターふくやま

大会主題　「自ら未来を拓き　ともに生きる
豊かな社会を創る日本人の育成を目指す小学校教育の推進」
―夢や志をもち　他者と協働して
主体的に新たな価値を創り出す子どもを育成する学校経営―

1　開会行事
2　実践発表
3　記念講演
『福山から世界へ』
－地域課題解決型ベンチャーフットボールクラブの挑戦－
福山シティフットボールクラブ代表　　岡本　佳大　氏
4　閉会行事

学校経営

「自ら学び　共に高まる　児童の育成」
～笑顔　やる気　元気あふれるチーム　大野東小を目指して～

廿日市市立大野東小学校長　谷本直子

一　はじめに

本校は、明治六年に開校し令和五年度に百五十周年を迎える。学校の横には多くの生き物が生息する永慶寺川が流れ、美しい田園風景が広がっている。記録が残る明治二十三年の在籍児童は四十三名であった。今年度は、八百五十五名三十二学級である。学校区には複数の団地があり、学校周辺の田畑の宅地化も進んでおり児童数は増加している。

二　経営の理念

「自ら学び　共に高まる　児童の育成」を学校目標に掲げ、育てたい資質・能力を「伝え合う力」「敬・愛・信の心」「体力を高める力」としている。これらを分掌、学年、全教職員、全児童の意識や取組に落とし込むために、様々な場面で繰り返し伝えている。なお、「敬・愛・信」とは、広島藩第十四代藩主の浅野長勲侯に揮毫して頂いた書の言葉である。児童には「人を敬い、愛し、信じる」ことができる人間になってほしい、そうすれば人からも慕われる人間になれるという老侯の思いが伝わってくる。平和を願い、違いを認め許し合うことが必要な今だからこそ、この心を育てることの重要性を感じている。

三　伝え合う力

今年度は「伝え合う力」の育成を柱に授業改善に取り組んでいる。自分の考えを言葉で伝えることが苦手な児童が多い。これから様々な場面で他者と建設的に話し合い、折り合いをつけていくためには、互いに考えを言葉で「伝え合う」ことが大切である。教職員は、児童に「伝えたい」気持ちをどのように育むのか、何をどのように考えさせるのか、どのタイミングでどのような集団で伝え合わせたら思考が深まるのか、聴き手に受け止め反応する力をどのようにつけるのかなど、学級経営とも絡ませながら指導内容・方法を考え実践している。

四　抱え込まない力

昨年、本校に赴任した日の職員会議で、ある職員から「働き方改革といってもやることは多く疲れている。校長としてどう考えるのか。」と問われ、とっさに「先ほども言ったように問題や悩みを抱え込まないようにしてほしい。私も業務改善について抱え込まないようにしたい。アイディアをもらいたい。」と伝えた。実際、その後、アイディアが出され業務改善につながった。また、業務上のトラブルやヒヤリを早めに報告・相談に来る教職員が多くなり、全てではないが初動のミスを防ぐことができたり、仕事や人間関係の悩み相談に来て元気を取り戻したりすることもあった。もちろん、校長も抱え込まず教頭、主幹教諭、主任等と共に役割分担して対応している。

五　おわりに

本校には明治時代からの卒業写真が飾ってある。令和の時代までの卒業生を見ながら学校教育は、人を育て、社会を育て、時をつなぐかけがえのない営みだということを実感する。児童、保護者、地域の方々、教職員との出会いを大切にし、共に、未来に向け本校ならではの特色ある学校づくりをしていきたい。

学校経営

理想とするところは、”釣り好きの親父”の姿
楽しい学校にすることに全力をかける

尾道市立栗原小学校長　石川順雄

一　はじめに

栗原小学校に着任することが決まったとき、市教委から示されたスクールミッションは、「『栗原しぐさ』を基盤とした小中連携の推進」だった。

「栗原しぐさ」というのが分からないので、前任校長に電話してみたところ、すぐさま「栗原しぐさ」を説明する掲示物を送って下さった。

「栗原しぐさ」とは

○立ち止まり、目を見て挨拶をする。
○ゆずる気持ちを大切にする。
○気持ちの良い学びの場を作る。

バイク乗りのわたしとしては、（そんなことしたらこける）というのがファースト・インプレッションである。

二　学びの変革推進上の課題

着任して最初に出会ったのは、「栗原スタンダード」だった。これは、児童・教職員・保護者のための学び方ガイドブックで、手の挙げ方や学習中の姿勢、ノートの取り方など、栗原小学校における学習の進め方を一冊にまとめたものである。前書きには基本となる考え方が明記されており、作成者の確かな見識が伺える。冊子の後半には「栗原小学校教職員としての約束二十六か条」というページもある。生徒指導規程教職員版である。

型を重視する栗原小教育は、「栗原スタンダード」をツールとして教職員が共通認識のもと指導の在り方を標準化することで、単元末テストの平均が八十五点を超えるなど、明確な成果を上げている。

一方で、変化に対しては脆弱な面も見られる。授業スタイルは知識伝達偏重の傾向にあって、児童も教職員自身も、自ら表現することや発信することが苦手である。子供たちの学びを主体的なものとするためには、教職員の主体性こそさらに伸長することが求められる。

三　学校経営の理念

主体性ある子供の育成を目指すとき、理想とするところは、”釣り好きの親父”の姿である。

釣り好きの親父は少しも苦にせず釣りのことを学ぶし、道具もしっかり選ぶ。誰にも頼まれなくても集中してやる。それが楽しくて仕方がない。うまく行けばまたやるし、うまく行かなくても、道具を買い足したりやり方を変えたりしてまたやる。そうして獲得した知見は実際の釣りに活かされて、その知識や技術は本物となる。

釣り好きの親父の姿こそ、校長の考える最高の学びの在り方である。楽しいからやる―という極めて分かりやすい話だ。楽しい授業を実現すれば、子供の心にドライブがかかる。そうなったら、他人が止めようとしても、止まるものではない。仮に誰かから止められても、子供はまた学び始めるのだ。

四　栗原小学校の現状

学校経営方針の柱に、「主体的な学びの実現を目指す」と明記した。そのため、「教職員は教育の最大の資源だ」と考え、一人一人全員が持ち味を生かして取組むようにさせた。

新型コロナウイルス感染症が少し落ち着いた今夏は、教員自身が楽しくてやりたい授業を提供し、全校児童が自分で選んで学年問わず受講できる「スマイル授業」を行った。よいことか悪いことか…、児童はふだんの授業よりも喜んで参加していた。

本校の学校経営方針では教職員の判断基準・行動基準として「S、A→B→C」を明記し、決断の確実化・迅速化を図っているSafety（安全・安心を全ての前提とする）、Achievement（目的主義で実行する）、Basic Regulation（基本的なきまりを遵守）、Challenge（「やってみたい！」と心を動かす）。

その結果、この二年間で「どうしたらいいですか」「どちらがよいですか」と問う教職員は少し減った。最初は「あんたはどうしたいんや？」と返されることや「担当者が選べんもんはどっちも駄目よ」と突き放されることに戸惑いを感じていたようだが、今では「こうしたいんです」と言う教職員が少し増えた。

五　持ち越しとなっている課題

生徒指導加配を得たことで栗原小学校の機動力は高まり、不登校児童の状態や状況は確実に改善傾向にある。しかし不登校以外の事案については、対処療法的な対策にとどまっている側面が強い。保護者の中には「栗原小教育が我が子には馴染まない」と感じる方がいるなど、学校や担任への不信感も垣間見られる。

最近では地域や家庭の問題が学校に持ち込まれるケースが増加し、教職員が疲弊している実態もある。若く未熟な教職員が多いのは事実だが、正確な状況把握ができないまま対処だけ先行しているケースも見られる。学習指導案を書かせると、これまでの体験や学習歴、レディネステストの結果は書けても、それが児童『観』になっていない教員が多い。事実を確認して、これをどう見取るのか―。児童理解に加えて保護者理解の力も強化し、地域や保護者に柔軟に対応したり交わしたりしながら、学力向上という学校の本丸に力を傾注できる体制を整えていく必要がある。

朝会講話

ナイル川のアリ

会員　高垣和子

アフリカのエジプトにナイル川という大きな川があります。泳げないはずのありが一度に三千匹もこの川を渡るのだそうです。では、どうやって川を渡るのでしょうか。まず、アリたちは互いが離れないようにしっかりつながりながらドッジボールほどの大きさの塊を創ってナイル川の流れに乗って浮かび上がります。その時、三分の一は水面から出ていますが、残りは水の中です。そのまま流れていては水の中の三分の二、つまり、二千匹は溺れ死んでしまいます。そこで、川に流されていく途中で、水の上のアリは次第に水の中に入り、その代わり、水の中にいたアリが水の上に浮かびあがり、次々と入れかわっていくのです。しばらくは水の中にいても大丈夫ですから、三千匹のアリたちは、水の中で苦しい支え役を交代しながらつながりを崩さず、ほとんど犠牲を出すことなく移動していくのです。力の強いアリが、苦しいことはやりたくないと言って、水面の上を独り占めしていたらどうなるでしょうか。水の中で支えていたアリは、次から次に溺れてしまいます。ついには、強いアリも含めて全部が死んでしまうでしょう。わがままを言って全滅してしまうのか、苦しさを分かち合いながらみんなで協力して生き抜いていくのか。ナイル川に住むアリは、生まれながらにその知恵を持っているのです。

皆さんも最高の学級を創ろうとみんなで取り組んでいますね。今日紹介したアリの話の中に、そのヒントがあると思うのです。ナイル川をわたるアリの知恵に学び、最高の学級・学校を創っていきましょう。

（福山市立多治米小学校）

みんなで学校の文化を創ろう

副会長・理事　古本宗久

今日は、児童の皆さんが十日市小学校の文化を創っていることについてお話をします。

四月に新しい学年がスタートして三か月が過ぎました。

この一学期に十日市小学校では、児童の皆さんが学校をよりよくし、より楽しく生活しようと、学級や学年で目標を立てて、友達と考え工夫した活動を進めてくれました。

自伸会や委員会の活動も活発になり、たくさんの児童の皆さんが活動に参加して、学校生活を過ごすことができています。

十日市小の児童の皆さんは、一人一人が一日一日を大切に過ごし、みんなが笑顔で気持ちよく学校生活を送るために、いろいろとアイディアをだしてくれています。

コロナウイルス感染症への対応で、人と人との繋がりが難しい中でも、他学年や学校外の人と交流ができるように工夫し、「思いやりの心」があふれる温かい学校の文化を創ってくれていることに先生達はとても感謝しています。

学校は、児童の皆さんが主人公になり生活をする場所です。

十日市小学校は、今、児童の皆さんが中心になって活動を創り、学校を創り、児童の皆さんも学校も大きく成長しています。

これからも、授業で学習したいことや学校生活のきまりのこと、やってみたいことや変えてみたいこと、「こんな学校にしたい」ということを提案してほしいと思います。

一人一人が輝ける十日市小学校を、みんなで力を合わせて創りましょう。

（三次市立十日市小学校）

「誰かのために」

理事　小川寛

レストラン「サイゼリヤ」の創業者正垣泰彦さんの言葉を紹介します。

山登りが大好きな正垣さんは、「僕は山登りが大好きなのですが、山登りって途中でものすごくつらくなって前に進めなくなることがあるんです。そんなとき、どうすればよいか知ってますか？」と問いかけられています。

児童の皆さんならどうしますか？（児童にしばらく考えさせる）

答えは「誰かの荷物を持ってあげる」ことです。正垣さんは、

「自分だって、もう一歩も動けないくらいきついんだよ。頭はボーっとするし、息は苦しいし、足も震えている。だけど、そこであえて誰か苦しそうにしている人の荷物を持ってあげるんだ。不思議なものでね、こうすると力が湧いてくるんだよ。自分のどこにそんな力が残っていたんだ？というくらいスイスイ登れるようになる。人間って不思議な生き物でね、自分のためだけじゃ力が出ないんだ。」

と言われています。人は誰かのために何かしようとすると、自分自身にすごい力が出るんですね。

さて、十一月十二日は川上小学校で何が行われるでしょう？（再度、児童に考えさせる）

学習発表会ですね。学習発表会には、皆さんのお父さんやお母さんをはじめ、たくさんのお客さんが皆さんを観に来られますね。ぜひ、たくさんのお客さんのために歌や踊りを一生懸命頑張ってほしいと思います。きっと、自分にすごい力が出ると思います。

十一月十二日、素晴らしい学習発表会になることを期待しています。

（東広島市立川上小学校）

県だより　委員

すべては子供たちのために
～学校における働き方改革の推進～

広島県教育委員会事務局学びの変革推進部
学校経営戦略推進課長　沖本　勝豊

働き方改革は、日本が抱える社会課題として、官民問わず取組が進められている。教育の世界も例外ではなく、学校における働き方改革（以下「働き方改革」という。）は、未来を担う子供たちの学びの質にも関わる重要な課題として、取り組んでいかなければならない。

そのため、各学校では、知恵を絞り、創意工夫しながら、長時間勤務の縮減や業務改善に取り組んでいただいているところであるが、取組に手詰まり感が出ているといった声も聴いている。

一方で、教員の一定数が長時間勤務をしている実態があるなど、本県の改革は未だ道半ばの状況にある中で、今一度原点に立ち返り、働き方改革の本質を見つめ直してみたい。

働き方改革の本質は、より良い教育を行い、子供たちの幸せにつなげること、つまりは、「すべては子供たちのために」ということであり、このことを常に原点としながら改革を進めていくことが極めて重要であると考えている。

社会が急速に変化し、複雑かつ予測困難な時代において、未来を担う子供たちが、時代の変化に対応して、たくましく生きる力を育むためには、より質の高い教育を提供していく必要がある。

そのためには、教員が、心身ともに健康で、生き生きとやりがいをもって、豊かな教職生活を送ることができる、日々、子供一人一人に全力で向き合うことができる環境を、学校と行政が力を合わせて整えることが不可欠であり、働き方改革の取組を強く推し進めていく必要がある所以である。

本県の教員が、限られた時間の中で、子供一人一人の良さや可能性を最大限に引き出し伸ばすことができるよう、子供たちの豊かな学びを創造し、また、子供たちの心にしっかりと寄り添い、豊かな成長を支えていけるように、学校と教育委員会が志を一つに、「すべては子供たちのために」という教育本来の使命をしっかりと果たすべく、働き方改革を一層推進していきたい。

随想

卒業アルバム

副会長　藤井義弘

令和四年が終わろうとしている。

今年は、第五十八回広島県連合小学校長会教育研究大会を福山市で行った。

県内はオンラインでの開催になったが、実行委員会を立ち上げた福山市校長会は複数回、打ち合わせを行い、準備・実行した。

始めは大変さが目立ってはいたが、会員同士、会話を重ねていくうちにやる気と協働性が沸いてきて本番では大きな達成感を得ることができた。

やはり、何か目的を達するためには、お互いが顔を合わせ、意見を交わさないと意思疎通しないことがよくわかった。

この春卒業を迎える子供たちは、約三年間に渡って新型コロナウィルス感染症の影響をまともに受けた世代である。学校生活での貴重な経験となる修学旅行や運動会といった学校行事も縮小や中止を余儀なくされてきた。また、日常の生活においても自由な活動やコミュニケーションを制限されてきた経緯がある。

そんな中、学校生活の大切な思い出を収める卒業アルバムは、卒業生にとって宝物となるが、前述の理由で「行事が中止で写真がない」「マスクをした写真ばかり」という声を多く聞く。

また、「デジタル卒業アルバム」の採用も増えていると聞く。

いつの時代でも、卒業アルバムは、子供たちの将来に思いをはせ、心を込めたものにしたい。楽しかった学校生活を振り返り、支えてくれた人たちに感謝する気持ちを感じてほしい。

卒業生は、卒業までの学校生活で何か一つ活動を企画し目的を明確にして、全員が会話を重ねていき、コミュニケーションを図り、活動をやり切ってほしい。

私たち校長が経験したやる気と協働性をぜひ感じてほしい。

体験したことを他者に語ってこそ経験に変わるという。その経験を卒業式で語ってこそ真の「心の卒業アルバム」が完成すると信じている。

（福山市立神辺小学校）

あとがき

コロナ禍が続く中、一人一台端末の有効な活用に向けて試行錯誤しながら取組が進められています。また、感染拡大防止のために各教科等や学校行事等の実施方法等についても学校が判断する機会が多数あります。今後も子供たちに必要な資質・能力を身に付け、主体的な学びを定着させるための取組が求められています。県連小を中心に県内の校長先生方と情報を共有するとともに、この会報が連携を深める一助となれば幸いです。

今回の発行に関わってご尽力いただきました皆様に感謝申し上げます。